人間発達学研究　第９号
157-158　2018年３月

■学位論文内容要旨

# 精神科病院への長期入院経験者によるそれぞれの「退院」の意味
## ―社会関係の広がりに着目して―

西本　彩香（2017年度修了）

### 1. 研究の背景

厚生労働省は，2003年から「精神障害者退院促進支援事業」（2008年から「精神障害者地域移行支援特別対策事業」に名称を変える。）により長期入院者の地域移行を本格的に取り組み，2004年，「精神保健医療福祉の改革ビジョン（以下，「改革ビジョン」とする。）を打ち出した。この「改革ビジョン」は，国民の意識変革や立ち遅れた精神保健医療福祉体系の再編と基盤強化を基本方針とし，「入院医療中心から地域生活中心へ」という基本理念を提示した。そして「受け入れ条件が整えば退院可能な者（約7万人）」を，10年間で退院させると目標を明示したが達成されていない。当事者主体の「リカバリー」志向の概念を現場に浸透させ，当事者の思いを尊重する地域生活への移行支援を行うために，当事者にとっての退院の意味を問う研究は不可欠であると考える。

### 2. 本研究の目的

本研究は，現在の精神障害者に対する退院支援の研究動向及び現状の課題を踏まえたうえで，精神科病院への「超長期入院経験者」へのインタビュー調査を実施し，得られたデータを社会関係の広がりに着目して分析することを通して「超長期入院経験者」にとっての退院のもつそれぞれの意味を明らかにすることを目的とする。そして，精神科病院への「超長期入院者」に対する退院支援の意義を考察する。

**【用語の限定的使用について】**

本論文では対象者を明確に区別するため，用語を以下のように用いる。

- 「長期入院者」とは，厚生労働省が用いる1年以上精神科病院に入院している人のことを指す。
- 「超長期入院者」とは，「長期入院者」の中でも10年以上精神科病院に入院している人を指す。
- さらに，「超長期入院経験者」とは，地域で暮らす10年以上精神科病院に入院していた人を指す。

### 3. 研究の方法

第1章では，NDL-OPACと『社会福祉学』2000年から2016年を中心に文献調査を行った。第2章では，X精神科病院における入退院のデータを整理し，全国データと比較し分析した。さらに，X精神科病院で実施した退院支援プログラムの受講者に関するデータを整理して分析した。第3章では，退院支援プログラムを受講した「超長期入院経験者」10人へインタビュー調査を実施した（愛知県立大学研究倫理審査委員会許可）。得られたデータから「人，場所，出来事」を取り出し一人ひとりのエコマップを作成し，社会関係の広がりを時系列と関係する領域から分析した。第4章では，前章の対象者の中から抽出した2人を対象として社会関係の変遷を分析し，さらにインタビュー調査の基データを使い「人，場所，出来事」が当事者にもたらした変化，当事者の変化が「人，場所，出来事」へ与えた影響について分析を行った。

### 4. 論構成

第1章　精神障害者に対する退院支援に関する研究動向

第2章　精神科病院への長期入院者に対する退院支援プログラムが与えた影響（統計調査）
第3章　地域に暮らす長期入院経験者の語りにみる社会関係の広がり（インタビュー調査）
第4章　地域に暮らす長期入院経験者の語りにみる社会関係の質―環境との相互作用関係―

## 5. 結果と考察

第1章では，精神障害者に対する退院支援に関する研究動向の把握を目的とした。第1章で明らかになったことの1つ目に，精神科病院における「長期入院者」の退院支援を課題とした退院支援プログラムの実践報告が中心で退院支援の意義にまでは触れられていないこと，2つ目に，「超長期入院経験者」の語りを通した精神保健福祉士（以下，PSWとする。）の支援論は見受けられなかったこと，3つ目に，「超長期入院経験者」と自己決定との関係性が示されていないという特徴がわかった。第2章では，「超長期入院者」の現状と課題を明らかにすることを目的とした。1つ目に，入院が1年を超えると家庭復帰が難しくなること，2つ目に，一定数の「超長期入院者」がいる現状があり，年齢を鑑みると退院支援は急務な課題であることがわかった。退院支援プログラムの実施結果からは，2つの退院支援プログラムを受講した「超長期入院経験者」は75％にのぼり，いずれも新たな住居で単身又は単身に近い共同生活を始めていた。退院支援プログラムは一定の効果があると言えよう。第3章では，「超長期入院経験者」の社会関係の広がりを明らかにすることを目的とした。「超長期入院経験者」の社会関係は，入院前の【孤立状態】から入院をきっかけに【医療者】を中心に広がりPSWを通じて【福祉関係機関】へ繋がる。そして，退院して地域で暮らす中で【名前のある関係性】へと変化していた。「人，場所，出来事」が本人の社会関係に大きく影響していたこと，社会関係の広がりは入院期間に影響しないことがわかった。第4章では，社会関係の質を検証することを目的とした。「人，場所，出来事」が本人の社会関係に相互に作用し，変化し，新たな関係性を作り，社会関係は人によって様々であった。そして，地域で暮らす中で自分の判断で関係性をコントロールすることが可能になったと考えられる。

## 6. 結論

「超長期入院経験者」が退院し地域で生活をするに至るまでのプロセスを詳細に分析したことを通して，1点目に，彼らの社会関係は「人，場所，出来事」に大きく相互に影響し合い，一人ひとり異なる関係性を培い，それぞれに意味を見出していたことを明らかにできた。その際，社会関係の変容プロセスは入院期間の長短に影響されなかった。共通していたのは，地域で暮らす中で社会関係性は変化し，新たな関係性ができ，変わり続けていることである。「超長期入院経験者」の退院の意味は，リカバリーそのものであるとわかった。2点目に，退院支援が困難だと言われた「超長期入院者」も，退院し地域で生活することで，環境が有する選択肢の中から自分で選んでいたことが明らかになった。自己決定とは，選択肢があり，選択する機会が保障され，関係性を自分でコントロールする権利を行使することだと言えるだろう。

すなわち，「退院したくない」と表明している「超長期入院者」に対する退院支援は意義があると言える。

つまり，人と環境に働きかける視点のPSWは，一人ひとり違う，自分の人生に希望をもって生きることができるように当事者と協働することが役割なのである。

## 7. 研究の限界と今後の課題

本研究では，「超長期入院経験者」に限定したため人選に偏りがあることは否めない。今後は「主体性」に着目して多角的に検証したい。